

## 山に親しみ山に想う (5)

### — なぜ山に登るのか — その2 (1/2)

<文・写真> =岡本=

1. (1) 本会報の2016年2月号に「なぜ山に登るのか」という同じ題で、マロリーの「そこに山(エベレスト)があるから」という応えについて考察した。マロリーの応えは、彼が生きた時代や個人的な状況・環境という制約の中でのものであったが、自分も含めて多くの人々が登山をしている現在、もっと一般的というか、一般化された応えはないものだろうか、いや一般化された万人が納得し得る一つの応えなどなく、細部を見れば登山者の数だけあるし、あってもいいのではないかなどと、思考を膨らませると、取り留めも纏まりもなくなっていった。

この難題に対する応えなど登山歴からみて嘴のまだ黄色い自分には出せる訳もないことを知らされた。応えを求める思考は収斂することなく、どこに飛んでいくかもわからなく、收拾できなくなってしまったのだが、取り敢えず、その軌跡の一端を披瀝して抜いた刀を鞘に納めたい。

(2) 現在、日本では850万人程の老若男女が登山を愛好し、各人各様の山登りをしている。近郊登山、日本百名山達成登山、海外登山、日帰り登山、長期登山、さらに難易度別に低山登山、高山登山、冬季雪山登山、岩登りの軽登山と極限登山など千差万別である。かかる中で、なぜ山に登るのかの問いかけについての応えを探すにあたり、比較的安全な軽登山と生死に関わる危険を意識させる極限登山を区別して考察しなければならないのではないかと思う。

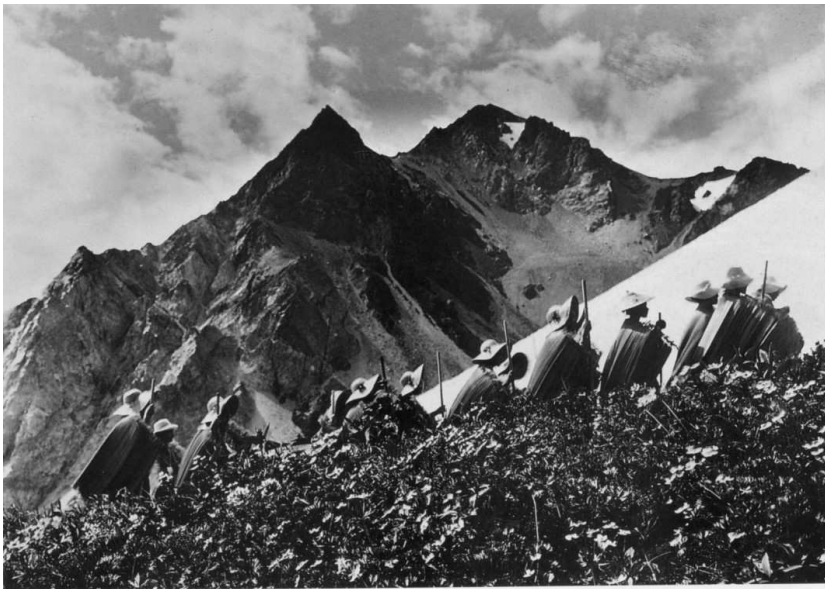
日帰りで低山登山というような軽登山をしている者と生死をかけた極限登山(高山登山、冬季雪山登山、岩登りなど)をしている者の登山目的や動機は、重なる部分は極めて少なく同列に論じられないのではないか。

山に登る目的と動機は時代の変化と切り離せない。山に登るという自然の山と人との関わる行為は、その時代の文化的、精神的、社会的な諸々の要因に左右されるからである。我が国の風土では、一万五千年前の縄文の時代から山なくして人々の生存と信仰はなかったと言える。山は生活の糧を供し信仰の対象(祖先崇拜、成年儀礼、雨乞い等々)であり、人々と融和した極めて身近い存在であった。明治期に近代登山の思潮と技術がもたらされ、生活と信仰に根ざした登山に覆いかぶさるように近代登山がわが国でも羽振りを効かせだしたのである。

ところで、近代登山発祥の欧州ではキリスト教がローマ帝国の国教になる前はさておき、それ以後の時代は永く山は悪魔が住むところという観念が根強く、山に入ることも登山も遠ざけてきた。つい200年前から欧州で近代登山が興ったのも、近代思想の勃興により宗教の呪縛から解放されたからである。わが国では宗教の呪縛はなく、7世紀頃から山岳宗教、修験道が出現し、大衆による信仰登山も既に江戸期に盛んになっている。欧州とわが国の登山の生立ちの差は、極めて興味深い。キリスト教という一神教とそうでないわが国の信仰、欧州の自然・風土とわが国の自然・風土の差異など諸々の要素、事情が異なっており、そこから登山の生立ちの差異が生じているのであろうが、その差異に理想的登山追求の礎を置くならば、山に対する接し方や登山形態についても、和は和らしく、欧は欧らしくという違いがあってもいいのではないかとの思いが胸中に去来する。

(3) これまで山関連の本をいろいろ読む中で、「なぜ山に登るのか」の命題に関連した登山家などの言葉を集めてみた。上述したように軽登山と極限登山を区別して考えたい。軽登山者に健康に良いから登るのですかと目的と動機を尋ねても、生死を意識して登る極限登山者には尋ねないはずである。極限登山者はもともと強健なことから健康目的ではないはずである。ならば、理由は何なのか。登山家が著した本は汗牛充棟(\*1) ほどもあるが、未だ爪の垢ほど読んでない。しかし、なにか納得に近づける応えはないものかと思った。著名な登山家にとっても、なぜ極限登山をするのかという問いかけに対する応えは至難のようである。その応えは、真剣に考え抜いたものなのか、軽く応えたものなのか、質問者のレベルに合わせたものなのか、質問が煩わしくて遁辞を弄したものなのか、色々なものがあるようだ。以下に引用したものだけで、その登山家などの考えを十二分に表現したものと決めつけてしまうわけにはいかない。読んでない本の中でもっと真理に近づいた深遠なことを同じ人が述べているかもしれない。

極限登山について言えば、その応えは永遠の未踏峰であるかもしれないというのが、結論かもしれない。あるいは、質問自体が結論を出せない質問かもしれない。



18. 河野齡蔵《白馬岳のお花畑に登る女子学生》1916(大正5)年8月

(4) 先ず、軽登山者について、「なぜ山に登るのか」と尋ねると、迷わず明快な応えが返ってこよう。それは具体的で納得のいくものであろう。「ヤマケイ登山学校(1)山を歩く」の第1章「山歩きの魅力」で、目次の項目として次のようなものを挙げている。

1. 山の美しい自然に魅せられて
2. 山歩きは健康にいい—丹沢通いで肥満、コレステロール、糖尿を克服、身体にいい山歩きが夫婦共通の楽しみに
3. 山歩きは心と精神の清涼剤—山歩きを始めて自信を回復、山の自然のなかで心を解放する山歩きは人生そのもの
4. 倦怠気味の気分をリフレッシュ
5. 知的好奇心を満たす山歩き—読んで登って書く、山には知的好奇心の対象がいっぱい
6. 山での人との出会い
7. 無限に広がる山歩きの楽しみ

軽登山の動機や目的となる魅力を具体的に網羅しており、これに反論すべき点はなさそうだ。しかし、人によっては軽登山であっても、これらの具体的な動機や目的以外にも具体的に表現

し難き動機や目的があるのではないかと言うかもしれないが、それは極限登山の部分での考察と関係するものかも知れない。「ヤマケイ登山学校」の本は「結局、山を歩く人はその人なりの理由によって山に向かっているわけで、万人を納得させるような答えはいまだに現れていません。ただひとつ、山を歩くすべての人々に共通している点があるとすれば、山を歩くことが自分にとってなんらかのプラスになっているという意識です。」と結んでいる。

2. 次に、著名な登山家などがどのように応えているか羅列してみる。極限登山を念頭にして応えているとみてよさそうである。

- ・ 木暮理太郎は人口に膾炙した「ただ好きだから登る。」と次のように述べている。「私達が山に登るのは、つまり山が好きだから登るのである、登らないでは居られないから登るのである、……なぜ山に登るのか、好きだから登る。答えは簡単である。しかし夫れでじゅうぶんであるまいか。登山は志を大にするという、そうであろう。登山は剛健の気性を養うという、そうであろう。その他の曰く何、曰く何、皆そうであろう。ただ、私などは好きだから山に登るというだけで満足する者である。」(田部重治著「日本アルプスと秩父巡礼」の序文、「ヤマケイ登山学校(1)より)



木暮理太郎

- ・ 大島亮吉は「涸沢の岩小屋のある夜のこと」と題する小文の中で、ある山仲間 の言として「スポーツ、趣味、勿論そうじゃないだろう。俺だっていま現在、俺の山登りはスポーツだとも思ってやしないし、趣味なんかでもないや。なんだかわからないが、そんなものよりもっと自分にピッタリしたもんだ。」と記している(「山の旅 大正・昭和篇」より)
- ・ 巖冬の北鎌尾根で最期を遂げた松濤明は著書「風雪のビバーク」の「山を想う心」の項で山に惹かれる理由について「山の持つ美への渴望—山の美に憧れ、しかもその遠見に満足せず、もっと端的にその真っ只中へ飛び込んで一つに相解かれたいと願う志—これこそ人間を駆って山へ向かわせる原動力だ。華麗、陰惨、明快、幽邃、重厚、深遠、平和、兇猛……山の美は選ぶ人の心により各様である。」と述べている。
- ・ 楨有恒は「アイガー—東山稜の初登攀」の中で「アイガーを仰いで今更のように、弱い心に不安が忍び寄って来るのをどうすることも出来ない。虚栄のための登攀か、野心のための登山か。そんな気持ちも何処かの隅にいくらか在るであろう。だがそれが動機ではあり得ない。どうしても登らずにはおられない気持ちである。それほど山の魅力は私にとって宿命的という他はない。」とアイガーを前にして思ったと述べている(「山の旅 大正昭和編」より)。
- ・ 元日本山岳会会長の西堀栄三郎は「(山登りの)どこがいいのかと聞かれて、はっきり答えられないのが山を愛する者の本音なのかも知れない。……山のどこがいいのかと聞かれて「さあ」と言っているのが、山登りの最後の心境じゃないでしょうか。」と述べている(「未知なる山・未知なる極地」悠々社、「永遠の未踏峰」より)。

- ・ 14座サミッターの竹内洋岳は「ヒマラヤ登山をしたくなるような性分を持って私は生まれきたという気がするのです。なぜ山に登るのか？私には「そこに山があるからだ。」と言ったマロリーのように格好いい答えは思い浮かばない。私が山に登りたくなるのは、「登りたいから仕方がない。」ことなのです。」と木暮理太郎と同じように述べている（「登山の哲学」）。
- ・ 野口健は「自然と国家と人間と」の中で、ヒマラヤにいる時の自分の表情を写真でみて、その眼光の鋭さに驚き、アフリカでみた野生の動物と同じ目をしていたと述べた上で「人がなぜ、あえて危険な冒険(登山)に魅せられるのか。時に五感をフルに働かせ、生き延びることだけに必死になりたいのかもしれない。人も動物だってことだ。」と述べている。
- ・ 高田直樹は「いい年して、なぜ岩に登るんですか、などとたずねられたら、うまいこと言えへんけど、何となくしびれるねん、そう答えることにしています。」と述べている（「なんで山登るねん」）。



- ・ 登山をよくする作家夢枕獏は「エベレスト神々の山嶺」の中で羽生に「山にはどういうものも落ちていない。あるとするなら、それは、自分の内部にある。無理に言うなら、山に登るといのは、あれは、自分の内部に眠っている鉱脈を探しにゆく行為なのかも知れない。あれは自分の内部への旅なのだ。」と語らせている(19章灰色のツルム)。
- ・ 深田久弥は「僕を山に惹きつける魅力は色々あるが、この人間生活の乏しさ、つまり山へ行けば社会を離れて勝手に呼吸し完全に孤独になれるということが、原因の一つだと思っている。だから僕が山へ行く時には、出来るだけ人の居らない時と所を選択する。僕が人間生活を忘れようとして山に行くのに、そこを 舞台にして小説なぞ書く気が出ないのは、当たり前ではないか。」と述べている（「名もなき山へ」の「山と文学」の項）。作家で登山をするのに何故に山岳小説を書かないのかという世間の暗黙の問いかけに対する理屈を述べているようにも受けとめられる。一つ目の魅力である避衆登山以外の魅力の、二つ目三つ目なども聴きたいものだ。

(次号へつづく)